

外科系医師のための臨床研究 手術を評価するアウトカム

本多通孝 ● 著

〔評者〕 佐藤雅昭 (東大病院講師・呼吸器外科)

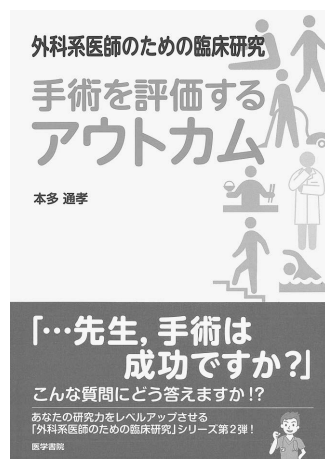
今回、本多通孝先生の著書『外科系医師のための臨床研究 手術を評価するアウトカム』を拝読する機会をいただいた。私自身も外科医として、とても納得というか、「そうだよな～」と激しく同意する部分が多々あり、大変勉強になった。これから臨床医として研究を進める若手医師にもぜひ一度読むことをお勧めしたい。

特に「おわりに」に書かれている、忙しい臨床医が業務と両立できる研究は「患者の生の声を形にする研究がよいのではないか」との言葉は、本多先生ご自身が第一線の外科医であることがにじみ出ており、わが意を得た思いだった。われわれ臨床医が研究を行う意義はまさにそこにあり、患者が何を期待しているか、われわれ外科医はそれにどれだけ応えられているかという問題は、大きな侵襲を伴い「肉を切らせて骨を断つ」手術という治療を行うわれわれにとって常日頃から真摯に向き合わなければならない課題である。

一方、本書に書かれている内容からは、それは言うほど簡単なことではない、というのが本多先生からの重要なメッセージと思われる。特に「第4章 手術を評価するQOL研究」に関しては、本多先生も執筆に苦労されたと書かれており、われわれ外科医のめざす手術と患者の受け取り方、そして患者の人生におけるさまざまなイ

ベントや人生観とその変化なども加わって、いかにその評価が難しいかがよくわかる内容になっている。命を救うことを第一に手術をして、それがうまくいって外科医が満足しても、その後の生活・人生の中でその手術の結果をどう解釈するかは患者次第であり、思わぬ不満を耳にすることは多くの外科医が経験していることだろう。本書では、これを研究という形で普遍的なサイエンスに落とし込む作業がいかに難しいかが、取っ付きやすい軽妙な対話形式で問われ、それに対する一定の答えが示されているところが実に秀逸である。

臨床医にとって研究とは何か—なぜ臨床医なのに研究するのか、これは私自身も追い求めているテーマだが、本書の中にはその答えに通じる内容が多く書かれている。そして「アウトカムそのものを深めていく作業を通じて、外科医のプロフェッショナリズムを高めてくれるヒントがたくさん見つかる」（「おわりに」から引用）という言葉がそれを実によく表していると思う。私の考えでは、臨床医にとっての研究は、日々忙殺されていると流れていってしまう日常の臨床活動に楔（くさび）を打ち込む作業であり、それは臨床医としてのプロフェッショナリズム追求の重要側面であると考えてきた。このように臨床研究というものを



のを philosophical に理解・解釈しつつ、さらに具体的な methodology に踏みこんで、「じゃあ何をどうするの？」に答えてくれるのが本書である。

本書は文体も親しみやすく（本多先生のお人柄がよく出ている）、構えなくても忙しい中でも、スイスイ読み進められるように書かれている。これから臨床研究を始めようとする若手医師（外科医とは限らない）や、実際に研究をやっている先生方にはぜひ一読いただきたい。

A5・276頁

2019年7月

定価：本体3,500円＋税

ISBN978-4-260-03932-1

医学書院刊